

龍源寺報

令和5年（2023年）秋彼岸号

派 樹 信 原 心 妙 宗 濟 臨
樹 覺 原 松 松 職 職 住 住 住
樹 行 原 松 松 職 職 住 住 住
TEL 3451-1853
FAX 3451-6094

振込 00160-0-104918 東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: info@ryugenji.com URL: http://www.ryugenji.com

秋彼岸に思う

龍源寺住職 松原 信樹

私は、縁があつて、幼稚園の年少・年中・年長と三年間、娘と向き合ってきました。家では、果てしない粘土遊びや積み木遊びによってリビングが散らかり、汚い葉っぱや、虫を家の中にかけてきて家内を驚かせたりしていました。最近、娘が虫を持ってきても、家内が驚かないようになりました。「遊び」を一緒に楽しむといった世界が芽生え始めてきたようです。

娘はいつも仲良し三人組で近くの公園で遊びます。よく見ていると、三人で遊びを考えて、ルールを作っています。ひとりひとり意見を出し合いながら、みんなで楽しめるように遊びを考えています。自分たちで課題を探し出し解決していく力や、新しいものを発見する力が、子どもたちには備わっているようです。彼女たちは、遊びの中で想像と創造を繰り返しているのです。

遊びというと、与えられたもので遊ぶといったことが多々あると思います。ネットゲームなどが挙げられるでしょう。子供がタブレットで遊んでいると、その時間、親は手が空くので育児に楽な部分もあるのですが、「依存症」、「朝起きられない」、「ひきこもる」などの若者が増えていると

いったことを耳にします。デジタルに対して慎重にならなければならないでしょう。とはいえ、大変便利なものでもあります。すべてのデジタルを禁止するのではなく、上述したように、親と一緒に楽しむと考えるてよいのでしょうか。

紀元前、中国戦国時代の『莊子』の一節を紹介致します。

むかし、莊周が夢に胡蝶となった。ひらひらとして、蝶そのものである。胡蝶が莊子(莊周)になったのか、莊子が蝶になったのか。

莊子はいたるところで主体性を楽しみながら、その場その場の連続的な変化に身を委ねています。蝶のときは蝶として遊び、莊周のときは莊周として遊ぶ。蝶になろうともしませんし、莊周で居続けようともしません。一切の懸念から解放され、彼はただ縁に従っています。

京都学派の西田幾多郎は、神は絶対者としてこの世の離れたところにあるのではなく、むしろそうしたあり方を否定して、この世の中に宿っているとされました。神は、この世界において、どこにもなく、またどこにでもあり、すべてのものは、あるがままにあり、それでよい、いわゆる、禅の言葉で、日常にはたらく心のあり方がそのまま悟りであるという意味の平常心をもって生きるということが肝要であると説くのです。

ご寄付

金三十万円也 中澤殿

金一万円也 荒尾誠一殿

ありがとうございました

※大変貴重なご寄付をありがとうございました。現在龍源寺のある古川橋周辺は、大規模な再開発が行われております。そのような中で、寺院を文化資源の一つとして考え、境内整備に力を入れています。未熟者ですが今後とも宜しくお願い申し上げます。

松原信樹

秋彼岸法要

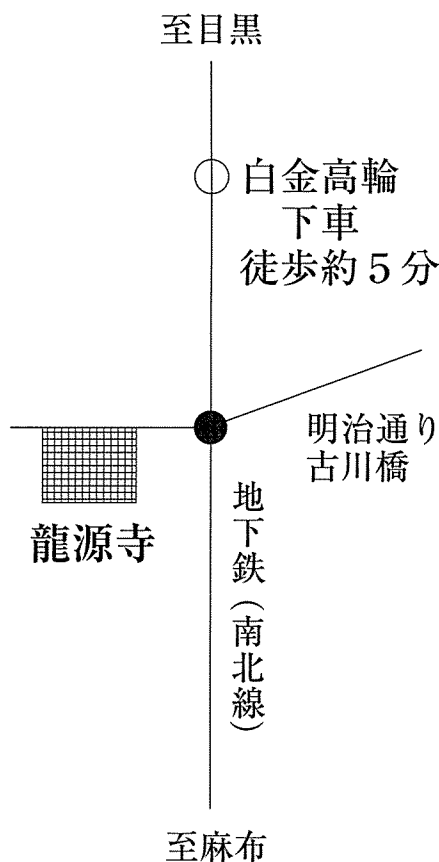
一、九月二十三日（秋分の日）

午前十時 落語会

午前十一時 彼岸会法要

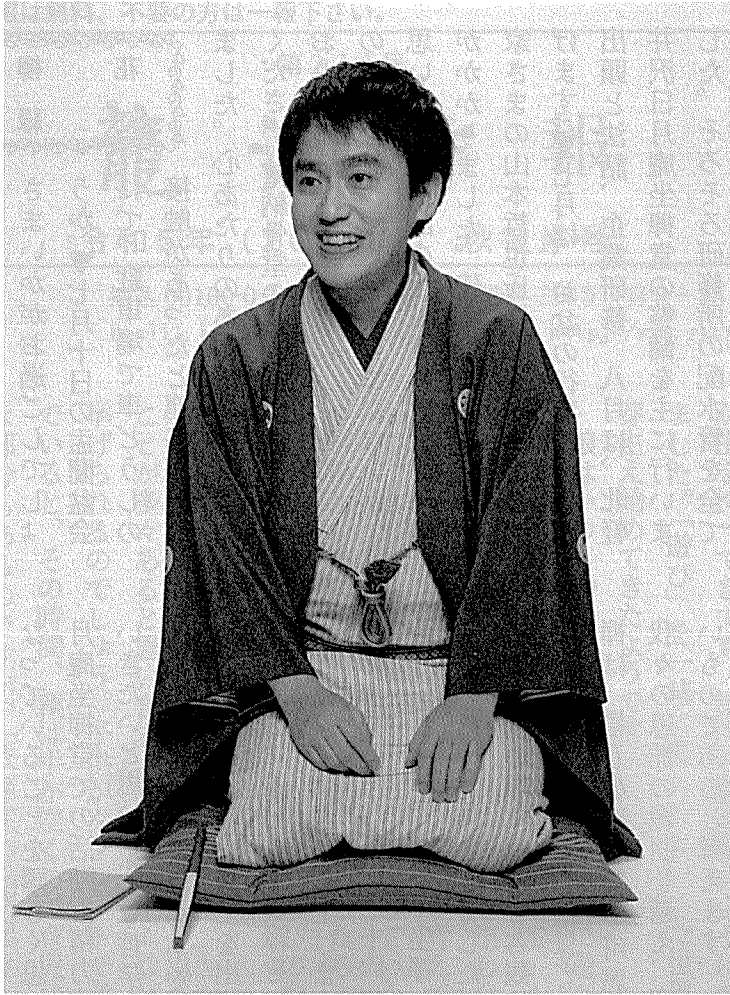
・駐車場はありません。

南北線をご利用ください。



龍源寺落語会

立川談修さん



プロフィール

落語家。立川流所属。

立川談志が認めた最後の真打。

一九七三年 船橋市生まれ

一九九五年 立川談志に入門

二〇一三年 真打昇進

令和五年九月二十三日

午前十時～十時四十五分

*受付は九時三十分より

当日受付・会費無料

皆様お待ちしております

住職

柳 緑

秋のお彼岸を迎えます。皆さまいかがお過ごしでしょうか。▼七月十日の盂蘭盆会

花 紅

にて、駐車場で車どうしの接触があったと連絡がありました。心あたりのある方は、ご連絡

ください。▼納骨堂の建設準備も進んでおり、秋彼岸会の頃には、正確な工事の日程などがでてくるのではないかと思います。申請の手続きに大変な時間がかかりました。建築家であり、お檀家さまの山本哲也氏に深く感謝申し上げます。▼七月は、お盆の行事での寺院出頭と法話、企業研修。八月は、北軽井沢日月庵坐禅堂の整備を主に行いました。そろそろ研修所の配水管を全て交換しなければならぬとのこと。来年は、家内が娘と同年代の子どもと親を集めて、日月庵坐禅堂でサマーキャンプを予定しております。以前、日月庵で「子どもたちの軽井沢」を催していたことを懐かしく思います。当時、子供会に参加されていた方々が五十歳くらいになります。お寺でその話がで

ることが少なくなると、良い思い出になつていくことを嬉しく思います。日月庵坐禅堂での活動も精力的に行つていきたいと思つています。▼哲学者の大竹裕氏との共著で『現代の不安を生きる』（BOW BOOKS）を出版致しました。出版に際して、ご縁をいただいた方々に深く感謝申し上げます。大竹氏との出会いは、平成二十六年の夏でした。はじめは、お寺で坐禅と哲学の会を催したいとのことでした。世界や人生の究極の根本原理を客観的・理性的に追求する学問である哲学とは異なり、禅は、悟りの境地は不可思議であり、我々の思惟の範囲を越え、表現できないものであると考えます。したがって言語による表現は、人を悟りに導く手段や方法であり、表現できる限界まで人を導いていくことができるけれども、その先は坐禅を通じて自分で体得し、あるいは師の心より弟子の心へ言語表現を通してではなく、以心伝心という直接伝えることであるとされます。ですから、私にとって、大竹氏との対話

はとても興味深く、今回出版した本の構成も非常に良く選択されたものになりました。▼アメリカで生活している弟が三週間ほど日本に戻り、龍源寺にもしばらく滞在していました。母にとつて孫と過ごす日々は、癒やしの時間にもなつたようですが、賑やかすぎでもありません。家内の亜矢さんは、重度の中耳炎を患い、会社の仕事にも影響がでてしまいました。娘との時間を取り戻すかのように日々を過ごしています。私自身、以前から宗教教育の大切さを実感してました。小学生という一生の基礎を作る大切な時期に、質素であること、そして、魂、知性、実行力という三つの方向性で女子として生きていく意識を育てていきたいと思つています。▼九月二十三日午前十時より、立川談修さんの落語。引き続き、午前十一時より、秋彼岸会を厳修致します。外階段からのご焼香も用意してあります。どうぞ、皆さま御来山ください。

（松原信樹）